

茶の歴史

Point! お茶は薬・解毒剤、高級嗜好品と変遷して、現在の形へ

【お茶の起源】

茶の発祥地は中国と言われ、もともと薬、解毒剤として用いられていました。「お茶を一服」という言葉はこれに由来すると言われています。

本草学の始祖、今日の漢方薬の基礎を築いたとされる神農が山野を駆け巡り人間に適する野草や樹木の葉などの良否をテストするため、1日に72もの毒にあたり、そのたびに茶の葉を用いて解毒したという話はお茶を知る上で重要です。



神農
(写真提供 三光丸クスリ資料館)

紀元前
2800年頃

神農が薬草をテストするときに、お茶を解毒剤として用いたと言われている。

紀元前
59年

王褒の『僮約』(契約書の意)に飲料として茶が用いられるという一文がある(中国)

→ [Check!] 王褒の『僮約』

760年

陸羽が『茶經』を著す(中国・唐時代)

815年

嵯峨天皇に僧・永忠が茶を奉る
(日本・出典『日本後紀』)
※日本の喫茶記録第一号



951年

皇服茶(大福茶)のはじまり(日本)

→ [Check!] 皇服茶(大福茶)



1191年

栄西禅師が茶の種子を持ち帰る(日本)

喫茶養生記

1214年

栄西禅師が將軍 源実朝に「喫茶養生記」とともに茶を献上(日本)



1522年

千利休生まれる(~1591)(日本)



1738年

永谷式煎茶創製(日本)

→ [Check!] 永谷式煎茶

千利休(写真提供 堺市博物館)

1835年

玉露の発明(日本)

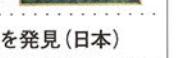
→ [Check!] 玉露の発明



1858年

日米修好通商条約締結。

日本茶が主要な輸出品となる(日本)



1924年

三浦政太郎が茶葉中からビタミンCを発見(日本)



1991年~

緑茶ドリンクの流行(日本)

【日本の茶の歴史】

日本の最古の、信頼できる喫茶記録は、『日本後紀』にある「弘仁6年(815年)4月22日、僧・永忠が嵯峨天皇に茶を奉った」というものです。当初、お茶は大変な貴重品でした。

それが普及したのは、鎌倉時代に臨済宗の開祖・栄西がお茶を中国・宋から持ち帰ったのがきっかけです。

当時のお茶は抹茶に近く、江戸時代に入ってからは煎茶が茶の中心となり、庶民の口にも入るようになりました。当時は、お茶請けには栗など木の実が食べられていました。

【世界の茶の歴史】

ヨーロッパに伝わったのは大航海時代に入る16世紀。中国広東にやってきたポルトガル人が最初にお茶を味わった西洋人だと言われています。

17世紀に入ると新たにアジア交易の権力を握ったオランダによってお茶(紅茶)がイギリスに輸出されるようになりました。お茶が世界の隅々にまで普及したのは20世紀に入ってからです。2012年の統計によると世界の茶の生産量は約450万トン、そのうち緑茶は約140万トン、紅茶は約260万トンであると推定されます。

Check!

王褒の『僮約』

『僮約』とは、前漢の文人、王褒が書いた僮(使用者)の職務を記した契約書のこと。この中に、「茶を烹る。武陽で茶を買う。」という文があり、この頃すでにお茶が飲まれていたと考えられます。

Check!

栄西禅師

平安時代末期から鎌倉時代初期に活躍した高僧。中国、宋に2度わたり、日本に帰る際に、修行の眠気ましに使われていたお茶の種子を持ち帰りました。禅宗の一派・臨済禅を日本に伝えた、臨済宗の開祖でもあります。



栄西禅師(写真提供 建仁寺)

Check!

皇服茶(大福茶)

皇服茶とは、大福、王服、大服とも書き、元旦に汲んだ水で淹れたお茶に、梅干と結び昆布を加えたものです。

その由来は、951年(天暦5年)にまでさかのぼります。

今でも京都では、元旦の朝、お雑煮を食べる前に皇服茶を飲んで一年の邪気を祓う慣わしがあります。

Check!

永谷式煎茶

永谷式煎茶とは、宇治の永谷宗円が発案した製茶方法のこと。それまでは中国の製法である、茶の芽を金で炒って乾燥させる釜炒り製法でしたが、宗円は蒸氣で蒸した葉をホイロの上で揉みながら乾燥させ、色・形・香りともに優れたお茶を作りました。別名・宇治製法ともいう。

Check!

玉露の発明

1835年(天保6年)に山本山の六代山本嘉兵衛(徳翁)が、山城国久世郡小倉村の木下吉左右衛門の家で、抹茶を作る過程で蒸された葉をかき回したところ、丸く団子になったところから「玉の露」と名付け、商品化しました。